

海賊系白髪無口っ娘
(凍結)

白金屋

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

イーストフル
東の海。

最弱の海と呼ばれるその海域に、ぼつねんと存在する孤島。

名をアルカミー島というその島で、今、新しい物語が始まろうとしていた。

※まことに勝手ながら、拙作を凍結させていただきます。

目次

プロローグ	1
第一話	4
第二話	11
第三話	17
第四話	22
第五話	28
第六話	34
第七話	40
第八話	46
第九話	55

プロローグ

「なあ、おれ腹減つちまつてさあ。まさかあれだけ積み込んだ肉が半日で切れちまうとはなあ……、いやいや、はっはっは、不覚だった」

「……………」

「よし、そういうことで、お前、おれと海賊やろうっ！」

まったくもつて意味不明だった。

私が生まれてこの方暮らしてきたこの島——アルカミー島を照らす日の光が、いつもよりも少しだけ強く感じられた今日のこと。麦わら帽子を頭の上に乗せて、頬になにやら傷痕をこしらえているその少年は突然やって来て私に向かつてそう言った。波の音が少しだけ遠ざかり、どこかで黒羽の鳥が鳴いたような気がした。

暑いから変なのが出た。そのくらいの感覚で麦わら帽子の少年を一瞥した私は足元に横臥する一メートル後半程の大きさの純白の毛並みを一撫ですると、腰掛けていた流木から立ち上がった。それに合わせて、同時に純白の毛並みの我が愛豹雪片もすつくと伏せていた体軀を起こし、頭を低くし、尻を突き出すような姿勢で伸びをしてから背後の鬱蒼と茂る雨林へと歩き始めた私に追隨する。

強引なのは、あまり好きではなかった。

「おつ、何だよ、どっか行くのか？ メシか？ 肉だな、よし、行くぞっ！」

森に入る私と雪片を追い越して、走り出す麦わら帽子の少年。それを見て今先程の考えを改める。

自分がしたいからそうしている。彼は、ただそれだけだった。強引だが、悪くはないかもしれない。そう思った。思うと、不思議と頬が少しだけ吊り上げられて、気づくと私は久方ぶりに微笑んでいた。

「がうっ」

雪片がご機嫌な様子で小さく喉を鳴らす。尻尾もふりふり、私が微笑んだことが嬉しいらしかった。そのことがなんだか嬉しくて、今の顔の作り方を忘れまいと両頬を手で包み込み、それから雪片の首のところの和毛を搔いてやる。

「ぐるうっ」

自分の機嫌を気取られているとは思わなかったのだらう雪片は、尻尾をさらに踊らせつつ仕方ないから撫でられてるんだよ、とでも言いたげにそっぽを向いた。

「ふふっ……、ありがとう、雪片」

「がうっ」

貸し一ね、そんなニュアンスで喉を鳴らした雪片はもつと撫でろと言わんばかりに和

毛を掻き回す私の右手をその長い尻尾でペしペしと叩いた。

さて、麦わら帽子の少年は一体全体どこまで行ってしまったのだろうか。

遠くのほうで木々が薙ぎ倒される音と何かを砕き割るような破壊音、そして、彼と何かとの二つの猛々しい咆哮が響いているのを耳にして、こちらへの野獣たちの凶暴性を身を持って知っている私は雪片と一緒に彼がいるであろう方向へと走り出した。

できれば彼には死んでほしくない。なんとなくだが、私はそう思っていた。

第一話

「ルフィ、いつまで、ここに……？」

麦わら帽子の少年——モンキー・D・ルフィと名乗る彼がこのアルカミー島に来てからすでに一週間と少しが経過していた。

雨林の開けたところで木を切り出し、薪割りに精を出しながら私は、今日新しくできた切り株の上に座っているルフィに問うた。この一週間、彼は飽きもせず私の後ろに貼り付きっぱなしだった。

最初の二日は口を開けば私と雪片を仲間にしたということばかりを言っているルフィだったが、三日目からはそんな様子もなくなった。押せば押すほど私が遠のいていくのを感じたのだろう。ルフィはそういうことに関しては妙に鋭い。けれど、一向に私を諦めるつもりはないらしく相変わらず私の後を追い続けることはやめなかった。

時折ルフィはふらつといなくなることがある。彼に対して少なからず情が移っている私は初めそのことで非常に肝を冷やしたりした。初日のことでルフィがこころの野獣たちよりも十二分に強いことを私は知っていたのだが、それと心配するのはまた別だ。最初の内はそわそわと落ち着かないことが多かった。すると、だ。なんと、雪

片が動き出す。雪片は雪片でルフィのことをなぜか気に入っているようだった。そして、二人は仲良く一緒にその日の夕飯の為の獲物を持ち帰る。

そんな一日が、四日、五日と過ぎていく。決して少なくはない時間を私と雪片とルフィは共有した。

新鮮だった。楽しかった。雪片との二人での日々が楽しくなかつた訳では決してないが、友人が、ルフィが一人増えただけで、臆気だった世界が急に色付いていく気さえした。

だから、この問いかけはある意味で自分で自分の首を絞めることに他ならない。

少しだけ、心がきりりと痛んだ気がした。

「いつまでって、うーん、村のみんなにもらつた船壊れちまつたからなあ……、どうしよう……?」

その答えに私は、密かに歓喜し、同時に虚しさと胸に鋭い痛みを覚えた。私にはルフィの現状打破を手助けできる手立てがあつた。彼の夢、少し前に彼が寝物語に聞かせてくれた世界で一番自由な海の覇者、海賊王の為の一步を私は手伝うことができる。

私の力を使えばそうすることができる。けれど、もしそうすればルフィは、この島から、私と雪片の前から去っていつてしまうのだろうか。

振り上げて、丸太目掛けて降り下ろした薪割り用の斧がその狙いから外れ、見当違い

の場所にかすつ、という音と共に食い込む。

当分の薪をすでに積み上げていたことに、私は今さら気がついた。

島の最西端、この絶壁の崖つぶちからは西の水平線に沈む夕陽がよく見えた。雪片と喧嘩したり、なにかに失敗したり、とにかく嫌なことがあるとこの場所に来て、今のうちに沈み行く夕陽を眺めるのが私のいつもどおりの気の紛らわせ方だった。

私には、六年前以前の記憶が一切ない。ただ、この右腕と私にある力のこと、そして、それに関する知識のこと。それだけは覚えていた。

孤独で、辛く、苦しい。けれど、どうすればいいのかわからない。凶悪凶暴な野獣たちが闊歩する絶海の孤島で、十歳にも満たず、記憶のほぼすべてを失った当時の私など、本当に、どれだけ弱く、ちっぽけな存在だったろう。今でも雪片に守ってもらうことが多いし、あんまり強くなった自覚もないしでたいして変わらないかもしれないが、それでも幾分かはマシだろう。

疲れ果て、すべてのことを憂鬱に感じ、それでも生きること諦めきれずに目前の死から逃げ回る私が、なにか依存できるような他者を求め始めたのはいつの頃だったろうか。

幸いというべきか、不幸にもというべきか、私の中にある知識にはその時の私の願いを実現するだけの能力があった。

私は、雪片を生み出した。約五年前のことだ。

雪片は、私を外敵、島の野獣たちから守ってくれた。その日の食料を採ってきてくれた。一緒に日々をすごしてくれた。記憶を失って目覚めた朝からずっと白黒だった世界が、少しだけ色をつけた。雪片だけが、私を理解してくれていた。

そして、ちょうど私が記憶を失ってから六年後の一週間と少し前のその日、ルフィがこのアルカミー島にやって来た。

初めはどこぞの阿呆が島に迷い混んできた、という程度だった彼への認識。それが、彼と時間を共にすればするほど改めさせられた。ルフィはただひたすらに私を仲間に誘い続けていただけだったが、それだけで周囲を惹き付けるなにかが彼に感じられた。もちろん、それだけで簡単に靡く私ではない。彼が誘ってくる度にシカトを決め込んだ。それでも、彼は諦めようとはしなかった。

嬉しかった。この島で暮らしてきて、ただ生きることしかしていなくて、それだけだった私を仲間にと誘ってくれることが。

雪片がいてくれても、紛れることのなかつた私の寂しさが、徐々に、だけど確実に緩和されていくのをこの一週間ずっと感じていた。

ルフィの誘いに乗るのもいいだろう。ていうか、乗りたい。本当にそう思う。

けれど同時に、私でいいのだろうか、とも思う。アルカミー島から一步も外に出たことがなく、雪片に守ってもらってばかりで、口数が少なくて、本当に、こんな私がルフィの仲間になっていいのだろうか。

鮮やかな橙の夕陽はとうに沈みきっており、私が見やる西の空は紫がかり、やがて幾多の星が瞬く漆黒がすべてを包み込んだ。

「なんだよ、見せたいもんって、食いもんか?」

「ん、違う」

「なんだ、違うのか。雪片はなにか知ってんのか? ていうか、なんで背中に木なんか背負ってんだ?」

「ぐるっ」

「行けばわかる? おう、わかった!」

どこまでも食い意地が抜けず、どうやってか雪片との会話を成立させるルフィにこの一週間と少しで覚えた新しい表情、苦笑いというらしいそれを浮かべる。

彼の手を引いて、海岸への獣道を走る。

私は、決めた。

海岸へ走り出した私は波打ち際まで歩を進め、ルフィには雨林を出たところで待つてもらおうように言い、雪片には背負っていた数本の木を海の中に投げ込んでもらってルフィと同じ場所まで下がってもらおう。

「すー、はー……」

軽く、深呼吸。久方ぶりの錬金術の行使である。少しだけ緊張する。

「なにやっつてんだ、あいつ」

「がう、ぐるう」

「見てればわかるのか？ んん、なんか、空気がぴりぴりする……？」

雪片に運んでもらった木を見やる。私の知識の中のその木は、ユルの木。水を弾き、その頑強さで知られている代物。その性質、構成物質、その構成方法までもを完全に理解する。

「んっ……！」

ぱんっ、という乾いた音を響かせて手を打ち合わせる。これで、輪つか、錬成の為の構築陣ができた。あとは、分解して、再構築の行程を可及的速やかに行うだけだ。合わせていた両の手をユルの木へ向ける。そうすることで私と海の中のユルの木との間に錬成反応としてばちばちと電流のようなものが迸る。月明かりのみが唯一の光源であ

るこの海岸でこの景色は、一体どう見えているのだろうか。

ユルの木がその形を失っていく。分解の行程。数秒しない内に数本すべてのユルの木がすべて跡形もなく失われる。

そして、次の瞬間、再構築の行程が開始される。より一層強くなつた錬成反応が周囲の暗闇を照らし出す。

木でできた小さな小舟の形をしたモノが構築されていく。ユルの木が消え去つたのと同じように、それも数秒の内に形作られ、錬成反応も収束し、やがて消える。

これで錬成の全行程が終了した。たった十数秒前まではユルの木が数本浮かんでいただけだったその海の中には、私が錬成したユルの木の小舟がぶかぶかと波に打たれ、漂っていた。

第二話

「雪片っ」

小舟の鍊成が無事に終了したことを瞬時に確認した私はその次の瞬間にはすでに雪片の名を呼んでいた。

「がうっ」

頼もしすぎる相棒の声と共にその声の主である純白の体軀をした雪豹が一息の間に私をその場から連れ去った。

視界が薄暗い海岸から茂る木々のせいで月光さえ届かない雨林の景色に変わる。

「ふう……」

結局、私が選んだ答えは逃げの一手だった。

どこまでもまっすぐに私に接してくれるルフィの気持ちはもちろん嬉しい。それに応えてあげることがも可能で、そして、吝かでないどころか願ってもないことだ。わかっている。

ルフィは私を外の世界へ連れ出してくれる。雪片以外で初めて会った人がルフィで本当によかった。きっと彼は私のように彼の人間に惚れ込んだ仲間たちをこれから先

もどンドン増やして行って、そして、その仲間一人一人を大事にする。それが当然のようにならなくても。わかつている。

全部、わかつている。

それが私にとって心底心苦しいことであるということも自分のことであるから、わかつている。

外を知らないことからの劣等感、不安。未知への恐怖。このアルカミー島への未練。全部全部、わかつている。

そして、私は、逃げることを選んだ。あの小舟はせめてものルフィへの気持ちだった。ルフィ……、ごめん……」

雪片の背中の上で触り心地のいい純白の毛に包まれながら私は、そつと呟いた。「んん？　なんで、おれに謝ってんだ？」

当の本人が私と同じようにして雪片の背に乗っていることに気づきもしないで。

「それで、なんで逃げるんだ？」

逃げる前からルフィに捕まっていた私は結局彼の意向に従い、昼間に私が薪割りをしてきた広場へやって来ていた。

何個もの切り株が連なる内の二つを私とルフィが埋め、雪片は定位置の私の足元。そして、私と彼のそのちようど中間に焚き火が揺れている。

ルフィの邪気のない黒い双眸が私を射抜く。

「別に……」

その瞳にすべてが見透かされていそうな気になった私は、ふっと目を逸らした。

彼はさらに私に詰め寄る。鼻先何寸まで互いの顔が近付く。

「なんか、隠してんだろ」

「……、特に、なにも」

「嘘つけ」

「あーうー……」

両耳を手で塞いで聞こえないふりを敢行。しかし、なおもルフィの視線は私を逃そうとはしない。

そのまま沈黙が場を支配した。

そして、夜の木々をざわめかせる海からの風の音、ぱちぱちと揺れる焚き火の音がなるとなくだけれど、私を心変わりさせた。

自分でも少し驚く。なぜだろうか。今なら話せそうな気がした。私の記憶のこと。雪片のこと。ルフィに出会う以前のこと、ルフィに出会ってからのこと。私が思い、悩

み、考え、感じたそのすべてを。

きつと、私を形作るなにかがそうさせた。

ただ寂しかった。

それから、その寂しさがルフィに出会ってよくわからなくなった。

でも、私の中の私は、ルフィが認めてくれた私は、なに一つ変わらない。今なら素直にそう思える。

「ほんとに、聞いてくれる、の……？」

ルフィは、私を受け止めてくれようとしている麦わら帽子の彼は、ただ一つだけ、おう、と頷いた。

「そういうのはな、お前、食い逃げ……、じゃねえや、やり逃げっていうんだぞ！ 逃がすか、この野郎！」

「ルフィ、私は、女。野郎じゃない……」

うら若き乙女を捕まえておいて、野郎とはこれ如何に。でも、ルフィだからの一言で彼に関するほぼすべてが、こういうことも含めて片つきそうなのがするのは果たして私の勘違いの内に終わるだろうか。

随分的外れな気がするルフィと私の会話を聞いていたのか、私の話をただの一度も横槍を入れることなく静かにしていた雪片が首を持ち上げた。

「がうっ」

雪片も私と同じようにしてルフィに抗議するように唸り、尻尾を突きつける。先に言っておくけど私は雌だから注意してよね、ということだろう。かつて私が雪片が雄か雌かを確認する為に股間のところにほんのちよつと粗相をしたことを未だに持ち出さんだね。ごめんね、あれは私が悪うございました。あのときは雪片のご機嫌取りの為に西へ東へと走り回って随分疲れた。もうあんな思いはご免である。

「ああ、そうだ、そういうえば、まだちゃんと答えを聞いてなかった」

ルフィのその言葉に思わず固唾を飲む。

右手で頭の麦わら帽子の位置を直した彼は麦わら帽子のつばの影に隠れ、口元しか見えなくなってしまった顔をにぱつと破顔させてから私の有り様までもを変えてしまう不思議な魅力を持ったあの言葉をもう一度、私に向かって言ってくれた。

「カノン、おれの仲間になって、それで、海賊をやろう！ 雪片も一緒だ！ お前が作った船で、あのでつけえ海に出るんだ。きつと、ぜんぜん見たこともねえわくわくが、冒険が、おれたちを待ってる！ 海賊王に、おれはなるんだっ!!」

「んっ……!!」

「がうつ、ぐるうー！」

生まれて初めて覚めやまぬ興奮を覚えたその夜、私は、錬金術師のカノンは、海賊モンキー・D・ルフィの仲間になった。

雲間から垣間見える月の光がアルカミー島を、イーストブルーを照らす。波は穏やかでいて、風も無邪気に踊る一夜が人知れず始まる二人と一匹の冒険を祝福していた。

第三話

イーストブルーの大渦。それは近海においてあまりにも有名な海の災害であつたらしいことを私は、オレンジ髪の航海士から聞き、後々知ることとなる。

突如として船乗りの行く手へと現れ、獲物を呑み込めば現れたときのように突如として消える。原因、発生時刻、発生場所等の一切が謎に包まれている大渦。グランドラインぼりの海災であるそれはつい最近になってイーストブルーに出没するようになったものである。そんなことを無人島に籠っていた私などが知っているわけがなく、もちろん、ルフィは知るよしもなかっただろうことは予想に難くない。

さて、そんな私たちが件の大渦に出くわしたとしたら、どうなるだろうか。

果たして、それは、常人であれば思いつきもしないような現実的と言えなくもない、しかしやっぱり適当で突飛すぎる案によつて九死に一生を得るような結果に終わる事と相成つた。

「……、まさか、樽の中に、放りこまれるなんて……」

暗闇と波の音に抱かれながら私は、樽の中に漂うほろ甘い香りに思いを馳せた。

あの日、島を旅立つ日、私はある荷物を船に積み込んだ。アルカミー島特有の樹木

トウルス。その果実であるトウルスの実。それを樽に山盛りにしたものを計三つ。さすがに多すぎかとは思いましたが、当面の間もつ食料なんてこれくらいしか思いつかなかつたのだ。トウルスの実は随分とながもちなのだから致し方なしである。それに、その樽を乗せるためにユルの木を新たに調達してきて船も少しだけ拡張したのだ。しかし、そんな私の心配りもルファイにはすべてが通用しなかつたわけではあるが。

摩訶不思議である。どうなっているのだろうか、彼の胃袋は。ほぼ一瞬で樽一つ分のトウルスの実を平らげてしまったのにはさすがに仰天した。九つほどはなんとかルファイから守りきつたが、それ以外はすべてルファイが半日も経たずにお腹の中に納めてしまった。

これは私、文句の一つくらいは許されるんじゃないやなろうか……。

まあ、しかし、そんなことを言っても仕方がない。現状をどう乗りきるかを考えるほうがよほど建設的である。

雪片、ルファイが入った樽とはどうやらはぐれてしまったようだがもとよりあの二人はこちらが心配などしなくても、きつと無事でいて、それどころかなにかしらの騒ぎを起こしているに違いないのだ。むしろ、二人に守ってもらおう立場であつた私のがよほど不安である。

はてさて、雪片もルファイも、私以外の誰かがいない状況なんていつぶりだろうか。

もしかしくなくても、私、ピンチである。

「ん……、……、くう……」

結局どうすることもできずに、この近海を根城にしているらしい主の到来を若干警戒しつつ私は、大渦を前にしても楽しそうにはしゃいでいたルフイを思い出しながら泣き寝入りすることにしたのだった。

「お母さん！ 樽！ ほら、あそこー！」

目を覚ました私の耳に最初に入ってきたその声は、多大な好奇心と僅かな興奮に彩られた甲高い少女のそれだった。

「あら、ほんとに樽だわね。これ、どうしたの、リカ」

続けて、少女の母親だと思わしき落ち着き払った女性の声が聞こえる。

「わかんないよ。私が、浜辺に来たらもうあそこにあっただもん」

「そうなの。どうしようかしらねえ」

「ね、お母さん、開けてみようよ！」

「ううん、そうする？ もしかしたら、流し樽かもしれないし」

「流し樽？ お母さん、それってなに？」

「流し樽っていうのは、正しくは海神御宝樽っていつてね。船乗りさんたちが航海の安全なんかを海神様にお願ひして、樽の中に食べ物やお酒、海神様へのお供え物を入れて海に流す樽のことよ」

「へえ、じゃあ、あの樽の中にも食べ物が入ってるの?」

「ええ。それに、流し樽の中のものには好きに食べていいのよ。ただし、そのあとにまた新しくお供え物を入れて、もう一度海に流すのがならわしなの。だから、リカ、海神様にちゃんとお礼を言つてから、樽を開けるのよ?」

「うん、わかつた!」

流し樽。そんなものがあるのか。初めて知つた。今度私もやつてみよう。

さて、どうやら私が入つた樽は雪片、ルフイの樽とはまったく別方向に流されたくらしく体感で二日間ほど海をさまよつたあとどこかの島に流れ着いたようだった。

いつまでもこんな薄暗いところにいるつもりはなかつたのでとつとと出ることにする。

ぱんつ、と両手を合わせて錬成を行うための陣を形成する。それから樽板に手を当ててその材木という物質を理解する。

青い錬成反応の光が暗い樽の中を照らしだす。分解の行程が始まつた。

徐々に外の、日の光が差してきて随分久方ぶりに感じるそれに思わず目をしばたかせ

る。瞳孔が閉じるまでの時間が実にもどかしい。

目がやつとこき日光の明るさに慣れた頃には分解、再構築の行程もすでに終了していた。

目の前にはこちらに手を伸ばした姿勢のまま硬直し、呆然と私を見つめるおそらくはリカという名の少女とその母親であるらしい妙齡の女性が彼女の娘と同じような表情で固まっていた。

とりあえず、体の前で手を重ね、腰を折ってお辞儀をする。

「はじめまして……、カノン、です……。 お供え物じゃあ、ないですよ……？」

名も知らぬ島における人とのファーストコンタクトの取り方など知らない私は、挨拶と自己紹介からまずはずべてを始めることにした。暗にお供え物ではないので決して食べようなどとは思わないでください、と伝えながら。

それから、なにより、ルフィが言うようなわくわくする冒険とやらを心待ちにしなから。

第四話

「つまり、傲慢海軍将校の、独裁……？」

「ええ、まあ、……。……。ちよつと前までは、生真面目ない海兵だったって聞いたんだけど、今の様子からじゃあ、まったく想像できないわ……」

その傲慢将校はどうも町民の言葉までもを制限し、己の権力を振りかざしているようだった。でなければ先のようなことを言うだけで今のリリカさんのように冷や汗は吹き出ないだろう。

ていうか、海軍という組織には一般民に対してそこまでの強制力があるものなのか。少し驚きである。下手をすればモーガンニアに身ぐるみ剥がされるよりも酷いことが起こる可能性も……。実際に今起こってるのがそれか……。

ぶつちやけ、ていうかぶつちやけなくとも私は面倒なところに流れ着いてしまったらしい。冒険はおもしろそうだけど、面倒事は勘弁願いたいなあ。

「モーガン大佐っていう方なんだけどね、あんまり関わらないほうが身のためよ、カノンちゃん」

不敬罪というやつに当たるとのだろうか。誰かに聞かれてやしないかとやたら周囲に

視線を走らせながらリリカさんは、それでも私を心配してくれているようだった。

「ん、気をつけます……」

「ええ、本当に……」

さて、駄弁つてばかりもいられない。宿屋がないらしいこの町にいる間私は、リリカさんの家でお世話になることになっていた。なんでも逝去した夫がいない分家のスペースが余っているらしい。居候する身でこういうのもあれだが、そういう問題ではないと思います、リリカさん。

もちろん、ただで居候というわけではなく、その間リリカさんが営む料理店でのお手伝いをするようになっていた。

そして、現在進行形で仕事をさせてもらっているというわけである。仕事の間の雑談は女にとつて栄養ドリンクみたいなものである。

「おーい、新入りちゃん、骨付き肉とオニオンスープ一つずつねー」

「ん、承ります……」

「新入りちゃん、お冷や頼めるー?」

「ただいま……」

「新入りちゃん! こっち注文お願い!」

「少しお待ちを……」

リリカさんの料理店は店主の料理の腕がいいことと看板娘のリリカちゃんの愛らしさからそれなりに以上に繁盛しているようで、お昼と夕方は全席満員にまでなってしまうほどである。今のようにリリカさんと雑談しながら仕事ができる時間はわりと少なめなのだ。

日が暮れ、階下の店のほうも夕方特有の喧騒はすでに収束し、今はリリカさんが後片付けをしている頃だろう。

私は先にながっても構わないというリリカさんの言葉に甘え、まかないを食べさせてもらったあとちやっちやと湯浴みをすませ、こうして割り振られた部屋へと退散していった。

暗闇の中でも爛々とその身を揺らす蠟燭の光を頼りに窓の側へと歩み寄る。噂程度にしか耳にしたことのない電気というものが普及していないシエルズタウンは篝火と蠟燭、暖炉を光源に夜を越す。窓を開け、そこから身を乗り出して見る町の夜景は人の暮らしというか、文明、人らしさというものを感じさせてくれ、私はそれが気に入っていた。長い間、未開拓の雨林で生活していたせいかもしれない。

ふと、月を見上げる。

「雪片……、ルファイ……」

彼女らは今どうしているだろうか。

私を探してくれているのだろうか。それとも、わくわくする冒険というものをしてい
るのだろうか。はたまた、誰かを仲間に取り入れようと奮闘しているのだろうか。なに
より、しつかり元気でいるだろうか。

はたして、私たちは再び会うことができるだろうか……。

ルファイは偉大なる航路を目指すと saying していた。

リリカさんに聞いた話ではそこへ行くには、赤い土の大陸を流れる駆け上がる滝とい
う摩訶不思議海流に乗らなければいけないらしく、最悪その手前にあるグランドライ
ンへの道のりにおける最後の停泊地点であるローグタウンという街にいれば、合流でき
るんじゃないかと思う。

とりあえず、今はここ、ゴート島のシエルズタウンで雪片とルファイが私を探しに来て
くれるのを待つことにする。雪片は鼻が利くし、ルファイの勘と合わさればきつとあつと
いう間に探し出してくれることだろうと思う。そう信じたい。切実に。

「雪片、月が、綺麗だよ……。ね、早く、見つけてね……。？」

そんな具合に夜景を見ながら黄昏ているときだった。

こんこん、と部屋のドアがノックされた。夜の訪問に少しだけ肩を飛び上がらせつつ

も入室を受諾する旨を相手に伝える。

枕を抱いてつぶらな瞳をうるうるさせながら部屋に入ってきたのは、自分の部屋です
でに寝ているはずのリカちゃんであった。

「ん、どうした、リカちゃん」

窓を離れ、リカちゃんの前でしゃがみこみ彼女と視線を合わせる。

微かな嗚咽を漏らしながらもリカちゃんは、私の部屋へやって来たわけをたどたどしく話してくれた。

曰く、怖い夢を見た。

曰く、一人で寝るのが怖いので、一緒に寝てほしい。

要約するとそんな感じである。もちろん、二つ返事で了承した。私のが歳上だから、
リカちゃんのお姉ちゃんなのだ。そう、お姉ちゃんである。……、お姉ちゃん。えへへ
……。

「カノンお姉ちゃん、おやすみなさい」

「ん、おやすみ」

二人でベッドに潜り込み、お互い向かい合った姿勢で瞳を閉じる。

安心しきった顔のリカちゃんは、すぐにすやすやと寝息を立て始める。私もそんなリ
カちゃんに感化されたのか、夜景のおかげで結構冴えていた目にだんだんとまどろみが

混じりだす。

「ん……」

瞼が落ちる直前、胸の中を横切ったその感覚を私は知っているような気がした。

それは漠然としていて、なんとというか、そう、端的に言えば嫌な予感である。

なぜそんなものを感じるのか疑問に思いながらも、眠気に逆らうに逆らえず、その夜は意識が落ちてしまった。

第五話

金髪マツシユル^ムが町に来ていた。

言わずもがな、シエルズタウンが誇る海軍第一五三支部最高責任者である海軍大佐斧手のモーガンの七光り息子のことである。言わずと知れた嫌な奴で、親の威光を盾に遊び呆けているチンピラという共通認識がある。

町のそこかしこで誰かしらを冷やかし、貶し、不当に罰する。

本人にはなんの力もなく、見た目はもやしっ子なのだが、奴の周囲に常時配置されている複数人の海兵と奴のペットとして知られている野放しの狼がなにより町民にとつては恐怖だった。

「ひえーっひえっひえっ！　おいおい、ガキい、オレの愛狼ちゃんに目をつけてもらえるなんて、ついてんじやねえか、なあ、おい！」

「ひうっ！」

艶やかな毛並みの狼が私とリカちゃん目の前で唸り、牙を向いた。

昼の客を捌ききつてからの小休憩中、ちよつとした買い出しのために私とリカちゃんは町の市へとやって来ていた。それがこの騒動の始まりとなることなど、知るはずもな

かったことは言うまでもない。

港町の市はやはりと言うべきか魚介類のスペースが大部分を占めており青物や果実、香辛料を置いてある場所を探して、私とリカちゃんは歩き回っていた。

「ハラペーニョ……、コリアンダー？ あはっ、変な名前……」

リリカさんから受け取った買い物メモに書かれた香辛料の名前を読み上げて、無邪気に笑うリカちゃん。それを見るこちらの表情もきつと緩んでいる違いなかった。

市の気持ちのいい喧騒。

隣を歩く少女の笑い声。

肌を撫でる塩を含む風。

晴れ渡った青い青い空。

昨夜、胸の内を過った嫌な予感などこれっぽっちも感じ得ないことに私は密やかに安堵していた。

あの嫌な予感アルカミー島にいたときには感じたことのないのなかつた類いのそれだった。

自分に迫る危険を察知してのそれでもなく、天候や海が荒れることを予想してのそれ

とも違うことはなんとなくわかるのだが、それがどういふものなのかが私にはいまいちわからなかった。

そして、再び、その感覚が胸中に去来した。

同時に、人々の声が周囲を駆け抜けた。

「へ、ヘルメツポが市に来るぞ！」

「な、なんだと!?! いつもなら、町の酒場を冷やかしただけで、支部に帰るのに！」

「くそつ、ついてねえ！」

ヘルメツポ、という人物がここへやって来るらしい。それがどうかしたのだろうか。そのヘルメツポとやらが危険人物だということか。

リカちゃんはそのヘルメツポがどういった人物なのかを知っているのか、なにやら怯えたような顔をしていた。

「く、来るぞつ」

誰かが言ったその言葉と共に市に姿を現したのは、数人の海兵と野放しの狼を連れだつて無駄にジャラジャラチャラチャラと着飾り、妙に自信に溢れている風体をした金髪のマッシュルームだった。

「へつ、相変わらず無駄に活気に溢れてやがる市だなあ、おい。オレの愛狼ちゃんが小腹を空かせてなきやあ、近づきたくもないぜ、ひえっひえっひえ」

一応、警戒のためいつでも動き出せる臨戦態勢をとる。

ヘルメツポ、というらしい金髪マツシユルムを見て、私でも倒せそうかな、と少し安堵する。笑いがなんとなく嘸ませ犬っぽいのがその思考をさらに加速させた。

「ぐるあつ」

ヘルメツポの愛狼が雪片には到底届かない威圧を放ちながら、私とリカちゃん目掛けて歩み出す。

周囲の町民たちのどこからか生唾を飲む音がした。

リカちゃんは怖いのか、私の腰元に腕を回し、ぎゅつとくつついてくる。

大丈夫だよ、私がいるから。と口にしかけて、普段の守ってもらってばかりの言えたことじゃないかと開いた口をつぐむ。

……、いや、これじゃダメだ。

少し、思い直す。

守ってもらえばかりはもう嫌だった。雪片に、ルフィに、これから出会うであろう仲間たちに、今から迷惑をかける予定をしていて、それでいいわけがなかった。

これからは、私も一緒に戦いたい。雪片の、ルフィの背中を見ているだけじゃなくて、彼女らの隣に立って、同じようにして戦う。

私を認めてくれて、仲間を誘ってくれたルフィのために。

生まれてこの方ずっと私を守ってきてくれた雪片のために。

私は、私のためにいてくれるすべてのために、戦うんだ。

だから、これは、その第一歩。

私もなにかを守るために、前へ進みたいと思った。

臆病で弱い私にしては大胆で、不遜な決意かもしれないなかった。けれど、今、リカちゃんはその前の狼を恐怖し、私に縋っている。この何日かで仲良くなったこの子を私は、守ってあげたかった。

「だから、ごめんなさい、狼くん。……、おとなしく、倒されて」
「ぐ、ぐるあっ!?!」

私の威圧を受けた今頃になって己が牙を向いた相手と己の格の違いというやつを思い知ったらしい狼は狼狽しながらも、種としての、自然界の強者としての尊厳に従って私に再度敵意を示した。

「ん、やるんだね……。私も、ここは、負けられないかな……」

小さな、けれど確かな決意を胸に抱いて走り出す。

狼も同時に動き出した。

手を打ち合わせ、陣を形成する。そのまま左手を右手の甲に乗せ、私は錬成を開始した。

瞬間、迸る錬成反応の青い光。擬似的な皮膚が裂ける感覚が神経を伝ってくる。

そして、錬成を終了した私の右手は、無機質で冷えきった鋭利極まりない細身のロングソードと化していた。

狼は今さつき起こったことに対して少しだけ萎縮したもののこちらへの突進を中止してはいなかった。

どんどん彼我の距離が縮まり、それと共に時間の感覚が長くなるような不思議な感覚を覚え始める。

そして、私と狼が交差したその瞬間、狼を二つの銀閃が走り抜け、その動きを止めさせた。

……、ん、二つ……？

「ああ、なんだ、別に助けなくてもよかつたか？　つち、つまんねえもんを斬っちゃった。……、つか、あんた、その右手、剣が生えてねえか……？」

流麗な一振りの刀を肩に担ぎ、腰に三本の鞘を差した緑色の髪の青年がそこに立っていた。

第六話

雲一つない日本晴れ。常ならば、その蒼穹を見上げて風情に浸れるのだが、今の状況に限って言えば、むしろ曇りめの天候のほうが私にとって都合がよかった。というわけなので、青空よ、可及的速やかに曇り空に移行してください。切実に。

海軍第一五三支部の演習場にて、容赦の欠片もない日光が磔の乙女の柔肌をじりじりと照りつける。剥き出しになっている素肌は、かれこれ三週間とちよつとほど日光を浴び続け、赤くなっている。これ絶対肌によくないよね……。それに加えて、お腹の虫が絶賛歌唱中っていう……。あーうー、恥ずかしい……。

あと一週間、私はこれを我慢しなければならぬ。そうすれば、私は晴れて無罪放免である。べつに海賊の私にとっては、海軍からの評価などはどうだっていいし、なにやり面倒くさいので、すたこらさつさと今すぐにでも逃げ出しても一向に構わない。だけれど、わざわざ目立つようなことをして海軍に顔を覚えられるのも、後々面倒そうだ。以上の理由から、私はこうして囚われの姫君ごつこに興じているわけである。

それもこれも、話は私とあの緑髪の剣士がヘルメツポの狼を成敗したあの日に遡る。

「て、ててて、テメえらあ！ オレの愛狼ちゃんをき、斬りやがったなあ!!？」

私と緑髪の剣士がヘルメツポ最強の手札であろう狼を斬り伏せたことで、彼は酷く狼狽し、海兵たちの後ろに逃げこみながらも怒鳴り声を上げた。

「ん……、手が滑った……」

「ああ、手が滑った」

悪びれもなくそう言う私と剣士の彼。凶らずも被ってしまったセリフが、なにか彼に親近感のようなものを抱かせた。

ヘルメツポはまったくもって悪気のなさそうな私たちを見て、ますます激昂し、喚き散らした。

「ウソつけえ、あんな手の滑り方があってたまるかあ！ くそ、くそつ、舐めやがってえ。おい、お前ら！ あの二人を捕まえろ！」

一連の騒動を傍観していた海兵たちが、ヘルメツポの言葉を聞き、やつとこさという感じで動き出す。

抜き身のままの流麗な刀を肩に担ぐようにしている剣士の彼と私を包囲した海兵たちは、各々海軍ご用達のカトラスとピストルを抜き放ち、武装解除勧告を行った。

無表情で上司というわけでもない阿呆の命令に従う彼らの瞳の奥に、僅かに光る意志

を垣間見て、それなりの同情の念が湧く。苦勞人の目だよ、ありやあ。逆らうに逆らえず、無茶苦茶な命令ばかりをこなしてきたんだらうなあ。

「最終通告だ。武装を解除した上で、任意同行をしてもらいたい」

ヘルメツポの取り巻きの海兵たち、命名苦勞人ズのことを勝手に不憫がつっていると、いつの間にやら件の彼らが目の前まで接近してきており、こちらに向けてピストルを構えていた。どうも自分の世界に浸りすぎていたらしい。

隣の剣士の彼は白く端麗な鞆にあの流麗な刀をとうに収めており、任意同行を承諾したらしく、すでに一人の海兵と共に歩き出していた。

そのときすでに海軍の指示にはできる限り従う方針が頭の中にあつた私は、言われるがままに鋼鉄製の右腕を再錬成し、元通りの腕の形に造り替え、同じく武装解除した海兵の一人を先導に海軍支部のほうへ足を向けたのだつた。

まあ、あわよくば少し興味が湧いた剣士の彼と会話の一つや二つを交えられたらな、という打算込みであつたのは認めないでもない。助けてもらったお礼もまだしていいわけだし、ね。

それから紆余曲折あつて、狼成敗の滅刑として、こうやつて演習場で磔になっている

わけだけれど、剣士の彼——ロロノア・ゾロというらしい彼とはそれなりに仲良くなれたのではないかな、と思う。

ここシエルズタウンは、物心がついてから初めて訪れることのできた私以外の人間が住んでいる町で、そこで出会うことができた興味対象に、私は存外思い入れができてしまったようだった。

礫にされていても寝てばかりいて眉間の皺が少し怖かったりするけど、私の辿々しい会話にも根気強く付き合ってくれたりするいい人のようだし、なんにせよ人と仲良くするのはいいことだろうと思う。それに、なんだかルフイもゾロのことをきつと気に入るだろうという予感がするのだ。

ゾロが私たちの仲間に加わるかどうかは私の預かり知るところじゃないけれど、きつと悪いようにはならない。そんな、予感。リカちゃんと一緒に寝たあの夜に感じたようなのではない、別の代物。

ああ、そうか、あの夜の嫌な予感の正体がなんとなくわかった気がした。

大切な、身近な、親しいなにか、あるいは誰かを失ってしまうかもしれないときに感じる、あの感覚だ。長らく忘れていたそれを私はたしかに知っていた。

——紅蓮に包まれる私の里とその上からさらに蹂躪を繰り返す凶暴極まりない島の猛獣たち。

——きっかけは錬金術実験の小さなミス。それによつて里を囲っていたダフトグリーンが一齐に枯れてしまったのが致命的だった。

——繰り返される惨劇の中で私は……、なにをしていたのだったか……。

——それからは、ただ里の皆、鋼鉄の腕を形見に消えてしまった同胞たちに会うことばかりを考えていた気がする。

——そして、あの場所への扉を開けてしまったのだ。その中で、私は……。

「……、つ!？」

……、私は今、なにを考えていた……？

とても大切な、忘れてはいけないなにかを私は忘れていたような気がする。

常、胸中に渦巻いている物足りなさ、虚しさをいつにもまして強く感じている。

これは、一体、なに……？

「おい、どうかしたのか」

横目でこちらを見やるゾロは、先程唐突に頭をよぎったなにかのせいで挙動不審な私

を心配してくれているのだろうか。

だとすれば、少し嬉しい。

さつきまで感じていたものが、僅かに和らいだような気がした。

「……、ん、大丈夫。ただの白昼夢」

「そうか。……、いや、待て、それは本当に大丈夫なのか？」

「ふふっ……、さて、どうだろう」

「お前……」

……、私は一体、何者なんだろうか。

第七話

磔になつていると、言わずもがな暇である。

あの雲はハンバーグ、あれはトウルスの実、あそこは肉……、なんてことをしてるといつの間にやら寝てしまつていたなんてのはざらにあることだ。

食べ物のことばかりなのはご愛嬌とでも言つておこう。気にはいけないことだつて世の中にはあるのだ。私のような乙女の周りでは特に、ね。

……、まあ、とにかく、暇なのだ。隣のゾロは本当に寝てばかりいるし、話し相手と言つたらちよくちよく私たちの生存確認に来るヘルメツポくらいのものだ。

徹頭徹尾シカトを決め込んでいるにだが、めげずによく来てくれている。しかし、そうすると彼は話し相手という括りには当てはまらないよね。なにせ、話そのものをしていないのだから。

などと金髪マツシユルームのことを考えていると、ふと、甘つたるい匂いが鼻についた。

風に運ばれてきたのだろうかと海風が吹いてくるほう、磔場と化している訓練場を囲む塀のその向こう側にある海のほうへ視線をやる。すると、塀から覗く六つの瞳と視線

が重なった。

「あ……」

そこには、麦わら帽子と眼鏡とシエルズタウンのとある料理店の看板娘がいた。

塀の向こう側の見えないところに雪片もいるのだろう。そんな気がする。

隣のゾロが鼻提灯を破裂させて、珍しく起き出す。そして、怪訝な表情で塀の上の三人を見やる。

きつと、私は笑っていたと思う。

見つけてくれた。私を。ルフィと雪片は私を見つけてくれたのだ。

それがたまらなく嬉しかった。

リカちゃんが塀を飛び降りて、訓練場を横切って私とゾロが礫になっているところまで軽快に走りよってくる。

「カノンお姉ちゃん、緑のお兄ちゃん！」

胸元になにやら包みを抱えたリカちゃんを私は、すぐさま帰そうとした。

私の腹時け……、体内時計が正しければ、この時間帯は常日頃あいつが来る。

「お腹、すいてるよね？ わたし、おにぎり作って来たの！」

褒めて褒めてと言わんばかりの笑顔で胸元の包みを開封し、私とゾロへと差し出す。どうやらあの甘ったるい匂いの正体はリカちゃんお手製のおにぎりからのものだったらしい。塩と砂糖を間違えでもしたのだろうか。

いや、それより早くこの子をここから去らせないと。マッシュルームが来てしまう前に。

「リカちゃん、ここにいちや、だめ……！」

「おい、ガキ。さつさとどつかへ行つちまえ」

ゾロも私と同じ考えなのか、強い口調でリカちゃんを帰そうとする。

「おにぎり！ はいっ！」

一方リカちゃんは余程おにぎりを食べてほしいのか、花の咲いたような笑みと共に甘ったるそうなおにぎりを私たちに突きつけるだけで、動こうとしない。

そして、いつものあの音がした。

誰かが訓練場に入るために鉄門を開く音。

「ひえーっひえっひえっひえ、元気がよお？ なあ、おい、緑色に白いの！」

最悪のタイミングでヘルメツポが来てしまった……。

リカちゃんが隠れるような場所はこの訓練場の中にはない。今でこそ訓練場の出入口から私とゾロが影になっていることでヘルメツポには彼女が見えてはいないが、気づ

かれてしまえば最後、私の可愛い妹分になにをされるかわかったものじゃない。

「ちっ、相変わらずだんまりかよ……、つまんねえな、おい」

焦燥が俄然増してくる間にもヘルメツポとの距離がどんどん縮まる。

リカちゃんは今になって自分がしでかしてしまったことの危険性に気づいたのか、顔を青ざめさせていた。そうまでして私たちにおにぎりを食べてほしかつたのかとほんわかしている暇などなく、なんとかしなくてはと焦りばかりが肥大していく。

そして……、

「ああ、おい！　なんでチビガキがこんなところにいんだよ！」

ついにリカちゃんが見つかってしまった。

ヘルメツポは訝しげにリカちゃんを見やる。既知の人間であるのがわかると、今度はリカちゃんが抱える包みになり始めたらしい。

「おにぎり……？　テメエ、チビガキ、こいつらにか、それ」

「そ、そう！　私を助けてくれたからっ、だからカノンお姉ちゃんと緑のお兄ちゃんに食べてもらうの！」

「はっ、ふざけんなよっ。こいつらはなあ、一ヶ月なあんにも食っちゃダメなんだよ！」

「なんでよ！」

「テメエに教えてやる義理なんざ持ち合わせてねえんだよ！　ふん、どうせならオレが

ちよつとばかし味見してやるよ、ひえーっひえっひえっ！」

「きやつ、や、やめて、やめてよ！ それはカノンお姉ちゃんと緑のお兄ちゃんのの！」
「知るか、そんなこと！ どれ、あーん……」

力任せに十程も歳が離れたリカちゃんからおにぎりの包みをかつさらつたヘルメツポは、いかにも初めての手料理感溢れる歪で巨大、なにより甘つたるそうな匂いにするリカちゃん印のおにぎりを手に取ると、さつさと口の中へ放り込んだ。

よくもあの大きさを一口でいけるものだなー、と思いつつ、咀嚼を繰り返すヘルメツポを観察する。

なに、止めても止まらなかつただろうから止めなかつただけさ。無駄なことは極力しない主義なのだよ。

なんて心中で言っていると、ヘルメツポの顔が三割増しで表現しにくく歪んだ。

「あ、あ、あつめええええ!! おい、チビガキ！ テメエ、おにぎりに砂糖塗り込んでんじゃねえよ！」

「ひうつ……、だつて、甘いとおいしいと思つたんだもん！」

まあ、初めての料理なんてそんなものだと思う。私の場合には島で仕留めた猛獣の肉を天然の塩で炙つただけだったから、失敗のしようがなかったけど。

「バカか！ おにぎりは普通塩だろうがよ、し、お！」

「だ、だつて！　だつてえ……」

「くそつ、こんなもん、食えるかってんだよ！　このつ、このお！」

余程腹に据えかねたのか、ヘルメツポは余つたおにぎりを包みごと地面へ叩きつけ、さらには足で滅茶苦茶に踏みつけ始めた。

「やめて、やめてよおつ！　食べられなくなっちゃう！　お願い、やめてえつ！」

「ひえーっひえっひえっひえっ！　こんなもん食うやつなんざ、いやしねえんだよ！」

訓練場に響く笑い声と泣き声。対称的なそれらは笑い声の主の気の済むまで辺りに反射し続けた。

第八話

罪人に肩を入れし者同罪とみなす。

海軍大佐斧手のモーガンの名でそう記された立て札、リカちゃんにその意味するところを恐怖心と共に刷り込むように覚えさせようとするヘルメツポ。

気がすむと、今度は連れの海兵にリカちゃんを塀の外へ投げ捨てるようにと無茶な命令を言いつけた、というより、怒鳴りつけた。

泣き崩れていたリカちゃんを優しく抱えあげた海兵は何度も彼女の耳元で謝っていたが、やがて塀の外へと命令されたとおりに——どう見ても嫌々という様子だったが——投げ捨てた。

「どうやって抜け出した、あいつ……」

そんなゾロのセリフを耳に残して地を蹴った私は、宙へ投げ出されたリカちゃんの小さい体を飛び上がった先で受け止めていた。

えへへ、ごめんね、ゾロ。実は縛られるとき咄嗟に縄に細工をしてたんだよね。ていうか、普通に錬金術で縄の性質を脆く造り変えただけなんだけど……、まあ、普通はそんなことできっこないか。

「え、お姉……、ちゃん？」

「ん……、呼ばれて、飛び出て、じゃじゃじゃーん……」

言ってみたものの少し恥ずかしくて、腕の中のリカちゃんから目をそらす。

いや、そんなことを考えている場合でもないかなと、ぐんと跳躍具合が縮み始めたことに危機感を抱くが、そこはそれ、頼れる相棒の出番だったりする。

ぐるうつ、とため息のように喉を鳴らした純白の体躯の愛豹——雪片が私とリカちゃんの着地予想地点へと一瞬で移動する。

「んっ、さっすがあ……」

一ヶ月近く顔を合わせない、ということなど考えたこともなかったが、考える必要すら感じたこともなかったりする。

それほど、信頼している。

「ね、雪片。ありがとう……」

「ぐるっ」

些か嬉しそうな声音で応えてくれた雪片の横つ腹に受け止められる形で無事着地した私とリカちゃん。

二本の足をそれぞれ地につけたりカちゃんは、つい先程泣いていたことも忘れて、いきなり宙へ放り出されたのをきちんと受け止めてくれた雪片にさっそくご執心のよう

だった。

「わああ、すごい！ 真っ白、おつきい！」

「るるるう」

さて、一つやるべきことができた。

ああ、その前にルフィにもお礼を言わなきゃ。

「……ルフィ、ありがとう」

「おお、なんだよ？」

「私を見つけてくれて……」

「ああ、ていうか、カノンっ、おめえのせいですっげえメンドくさかつたんだぞ！」

「ええ……」

なぜお礼を言って逆に非を突き付けられねばならぬのか。

「私、なにか、した……？」

「いや！ たぶんなんもしてねえ！」

ますますわけがわからないよ、ルフィ……。

「あの、すみません。あなたがカノンさん？ ですよね？」

塀の上から訓練場を覗きこんでいた三人目である桃色の髪をした眼鏡の少年が問うてくる。

そういえば、この人のことも気になってはいたのだ。新しい仲間の人か、あるいはルフィに連れ回されている被害者か、いや、どっちも本質的には大した違いもないんだろうけど。

「そう、です。私に、なにか……?」

「ああ、いえ、そのですね。ある人物から預り物があるというか……」

「預かり、物……?」

「その、はい……、これ、なんですけど……」

少年が彼の懐から取り出された封筒を差し出してくる。黒地に金色で装飾され、ご丁寧に蠟で封をしてあるそれは差出人無記入のいかにも怪しげな風体だった。

「ん、これ、差出人は……?」

「えっと、はい、ノワールと名乗るお綺麗な方で……、あなたの、カノンさんのことをお母様と呼ばれていましたけど……」

「お母、様……、……っ!?!」

そう呼ばれる心当たりは一つだけなら、ある。もし、そうなら……、ああ、なんということだろう。

ノワールか。かつてはそう名乗っては……、いや、名すらない存在であったというのに、私に手紙まで出してくるなんて……。

「ノワール……」

封筒と同じように黒地に金色の装飾が優美な便箋にはたった一行だけが書き記されていた。

——私は、人間になる。

短く端的なその一文は、それが持つ意味を嫌というほど私に理解させた。

近々、ノワールと会うことになる。そのことで今は頭がいつぱいになった。

「で、そのノワールってのがまたメンドくさいやつでな、そいつのせいでこの島に来るのにだいぶかかっちゃまったんだっ」

「いや、知らねえよ。つか、お前らどっか行け。ここは俺の場所だ」

ゾロが礫になっている前で堂々と話し込んでいる私、ルフィ、コビーくん、リカちゃんの一団。

といつても、ルフィがここ三週間ほどの土産話——まあ、そのほとんどがノワールへの愚痴だったけど——を一方的に喋っているだけだけ。

ヘルメツポとそのお付きはルフィと雪片が失神させている。というわけで気兼ねなくこうしているわけだけど、仮にも海軍支部でこの長時間の間警戒の巡回兵が一人も通りがからないのは、果たしてどうなんだろうか。

「というわけでな、おれは今、一緒に海賊をやる仲間を探してるんだ」

「ちつ、話の脈略がねえぞ、くそつたれ。にしても、はつ、海賊だと？ 自分から悪党に成り下がろうつてののか。ご苦労なことだな」

「……なんだ、お前、おれの夢を馬鹿にすんな。おれの意志だ。海賊になりたくてなにが悪い。それに、おれがなりたいのはピースメインだ。モーガニアなんかと一緒にすんな」

「ちつ、ああ、そいつは悪かった。精々頑張ってくれ」

「ん！ 謝るなら、許す！」

「はつ、で？ まさか、縄をほどいてやるから力を貸せだのと言い出すんじゃないやねえだろうな」

「いや、別にまだその気はねえよ。お前、悪いやつだつて評判らしいし」

「……、世間でどう言われてんのかは興味ねえ。俺は俺の信念に後悔するようなことはなに一つやった覚えはない！ これからもそうだ。そして、この状況も生き延びて、俺は自分がやりてえことを成し遂げる！」

「ふーん、そうか。まあ、おれがそんなになつたら、一週間で餓死する自信があるけどな！」

「俺とてめえじゃ、気力が違うんだ。てめえの仲間になろうっていう物好きを探すなら、他を当たれ」

「ああ、じゃあ、また来るな」

「ちつ、もう来んな……」

存外仲がよさそうな二人。立ち去ろうとするルフィから視線をそらしたゾロは物憂げな様子で、空を見上げた。

「あつ、麦わら帽子のお兄ちゃん！ 町に行くならわたしの家に寄って行ってよ！ お母さんがきつとご馳走してくれるよ！」

リカちゃんはゾロと私に手を振ると、笑顔でルフィの背へ飛び付いていった。ヘルメツポをはったおしたので、だいぶ気が楽になつていらしかった。

「あ、じゃあ、ぼ、僕もお先に失礼しますっ」

足早にルフィのもとへ駆けていくコビー君。気が弱そうだから、よつぽどここにいるのに緊張していたのだろう。

さて、私も行こうかな。もうここに縛られている理由もないし、もう海兵たちと一戦交えて海賊だつて名乗っちゃったしね。それに、わかつてはいたけれど、私に縛られる

ような被虐趣味はないみたいだし。あつたらあつたで、困るけど。

「じゃあ、ゾロ、私も、行くね……。またね……。？」

すでに扉を越えて町のほうへ行ってしまったルフィたちを追いかけるために、ゾロに背を向ける。

「……、ちよつと待て、白いの」

……、むう。たしかに私の髪はどうも色素が抜けきつてるっぽいけどさつ。私にはカノンっていう名前があるのにつ、もうっ。

「それ、取ってくれ」

どれだろう、と振り返り、ゾロの視線が示す先にはリカちゃんお手製のおにぎりだったもの。

「……お腹、壊すよ……。？」

「ガタガタぬかすな。黙って食わせろ。落ちてるの、全部だ。あー」
上からの姿勢で言いつけて、大口を開けてスタンバイするゾロ。

……、まあ、いいけどね。ふふっ、私、ゾロのこと結構好きかも。

ヘルメツポが泥の塊に変えてしまったおにぎりを拾い上げ、ゾロの口元へ運ぶ。

「はい、あー、ん……。？」

「……、っ!? っっっ!?」

ばりばりと音を鳴らして砂利、泥と共に咀嚼し、飲み込む。

きつと、こういうのを男前とかっていうんだろなあ。

「おいしかった……？」

「ごふっ……、ああ、あのガキに伝えてくれ。うまかった、ごちそうさまでした、つてな」

「ふふっ……、ん、絶対、伝えるっ……」

「なら、さつさで行け……」

「ん、また、ね。あと、私の名前、カノン、だから……」

「ちっ……」

嫌そうな顔をしたゾロは口をもごもごと動かしながら、でも、いつものように寝ようとはせず、なにかを考えているようだった。

第九話

「俺は、偉い……!!」

己の権力ちからを誇示するようにそう宣った短髪の偉丈夫は、執務室の扉手前で待機する傍付きの海兵をぎろりと睨み付けた。

傍付きの海兵は、慌てた様子で軍式の敬礼を行い、先程の言葉を肯定する。

「はっ、なにしろ大佐でありますから、モーガン大佐!」

「ああ、その割りには近頃町民共からの貢ぎが少ねえんじゃねえか?」

「その……、大佐への納金に關しましては、なにぶん町民たちの懷事情にも限界がありません……」

海兵は、元より正義感から海軍に志願した一兵卒であつた。少年の頃の夢が未だに胸中に逆巻いていたことも要因の一つであつたといえる。

一般民を守るために訓練を積み、日々を精進してきた彼が数年前、この海軍第一五三支部に配属されたときは心が踊つたのをよく覚えてゐる。

海軍第一五三支部の斧手のモーガン。

イーストブルーにおいては珍しく腕つぶしだけで——あくまで地方支部の、だが——

大佐にまで昇り詰めたかの豪傑と仕事ができる。うまくすれば薫陶を受けられるかもしれない。そう思うと、なおのこと気合いが入ったものだ。

が、現実は違った。

憧憬していたモーガン大佐は地方支部の最高責任者として思うがままに職権乱用を繰り返して、滅茶苦茶を地で行く無法者の暴君であった。

恐怖支配。逆らう者は片端から死を持って償わせる。

正義感に溢れる若き海兵も歴戦の将校に敵うはずもなく、やがては上つ面だけでも従順なふりをしてみせるようになった。

「町民共の懐具合なんぞ知ったことじゃねえんだ。……要は、この俺への敬服度だ」

「っ……」

町民を守るべき立場にある人間がその立場こそを逆手にとつて町民を苦しめ、己の自尊心と優越感を満足させるための道具としか見ていない。

歯がゆかった。苦しんでいる人々のためになにもできない無力な自分が。

悔しかった。幼い頃に夢見た幻想が所詮幻想でしかなく、自分には他人を守る力などなにも一つないことが。

「親父っ！」

その人影が執務室に入ってきたのを確認した傍付きの端的な気持ちを表せば、う

へえ、という実に率直なもので、そのような感情を向けられる人間が好意的に他人に受け止められる人物ではないということを実に如実に示していた。

「騒々しいぞ、ヘルメツポ」

「ぶつ殺してほしい奴らがいるんだよ！」

また犠牲者が出る。

傍付きはただその事実を認識して、それ以上は考えないようにした。この数年ですっかりこのような状況に慣れてしまったかのように感じる自分自身に激しく嫌悪を抱きながら。

礫場から解放された翌日のこと。私は、ルフィと連れ立って礫場へととんぼ返りしていた。

「よっ」

「また来たのか。……、海賊の誘いなら蹴ったはずだぜ」

目的はもちろんのこと、ゾロである。どうもルフィは彼のが気に入ったらしい。

ちなみにコビー君は新しい仲間ではなく、同行者としてこのシエルズタウンまで船を共にしてきたらしかった。なんでも海兵になり、将来的には海軍将校になりたいとか。

旅路の中でルフィになにやら感化されたようで、お互い敵同士の立場を目指すくせにいやに熱く語り合っていた。

「おれはルフィ！ 縄といてやるから仲間になってくれ！」

「昨日の話聞いてなかったのか、てめえ！ 俺にはやりてえことがあると言ったはずだ。誰が好んで海賊になんてなるか」

「別にいいじゃんか。お前元々悪いやつだって言われてんだろ？」

「ちつ、だから世間への体裁など知ったことじゃねえと言ったろうが。海賊なんてまっぴらだぜ」

「……、知らんつ！ おれはお前を仲間にするって決めた！」

「勝手なこと言ってるじゃねえ！」

ルフィ相手になを言っても骨折り損のくたびれ儲けってやつだと思う。

雪片が暇そうに体を擦り寄せてくる。離ればなれだったからか、いつもよりだいぶ素直に甘えてきてくれる。意地っ張りで寂しがりやとか……、可愛いなあ、もうっ！

「お前、刀使えるんだってな」

「ああ……？」

思うがままに会話を進めるルフィ。付き合わされているゾロはすでに疲労してきているようだった。

「まあ……、なにかに体をくくりつけられてなきや、一応な」

「刀は？」

「ちつ……、取られたよ。あのバカ息子にな。……、命の次に大切な、俺の宝だ……！」
思わず、どきつとした。

命の次に、いや、あの様子からして命と同等くらいの価値を見出だしているんだろう。そんな風に思えるものがあるっていうことはとてもかっこいいことなんじゃないかなあ、と思う。

ルフィにしたって、あのトレードマークの麦わら帽子がなににも代え難い宝の一つだつて言ってたし。もういくつかあるの、と聞けば、仲間って答えられて顔が赤くなつてしまったのは、記憶に新しいことだったはずだ。

私もそんなものができるかなあ、と少しばかりルフィやゾロのことが羨ましくなつて、ふと思ひ直す。

ふふつ、私つて、ちよつとバカだなあ。もういるじゃない。

雪片、ルフィ、リカちゃん、リリカさん、それから、ゾロも。

なんというか、そう、人とのつながりが私にとっての宝なんだ。……、なんてね。ぎゅつと、雪片の体に腕を回す。

「えへへ……」

もう少し、強くなりたいな。私の宝を守り抜くために。

「よし！ おれが刀を奪ってきてやるよ！」

妙案だとばかりにルフィが言った。

「ああ……？」

胡散臭げな眼差しでゾロは、自分の計画を得意げな顔で話し出すルフィを見やる。

「そして！ おれから刀を返してほしけりや、仲間になれ！」

「たち悪いぞ、てめえ！」

「はっはっは。よし、行ってくる！」

「おい、待て！」

なにやら助けを求めるような目で見られても困るんだけど、ゾロ。あの船長を止められるわけないよ。

まあ、えつと、ご愁傷さま……？

「てめえな……、はあああ……」

先輩船員からのアドバイスとしては、頑張つてね、だとか、元気出してね、とかぐらいいしか言えることないけど。